

柳田雑記22

ポール・エム・スイージーの「革命後の社会」を読んだ。

2018年7月18日 柳田 健

かつてレオ・ヒューバーマンとともに私の青春時代、アメリカを代表するマルクス学者として、その著作に親しんだ人物である。1910年生まれだから、そうとうな高齢である。

かつて称えたであろうソ連のその後の変質を明らかにした著作である。

マルクス主義者によるソ連批判である。

「疑いなく、ソ連における唯一の支配政党となったボルシェビキ党は、都市のプロレタリアート党として出発し、そのような党としてロシア革命における権力奪取の過程を先導した。しかし、内戦の数年間におけるこの階級の多くの者の死亡と分散に伴い、階級と党との間に確立関係は大きく解体されることとなった。そして多年にわたり(ほぼ1920年代及び30年代に)党の支配は軍隊と警察機構を掌握することによって行われたが、明確なあるいは堅実な階級的基礎を持つものではなくなっていた。

私(スイージー)のいけんでは、ソヴィエト社会を理解する鍵は、まさにこれらの混乱と対立の年

代を通じて、新しい階級が生まれ、しだいに共産党への支配力を得、その旧ボルシェヴィキ指導部を分解し、そして文字通りの支配階級としてみずからの位置について、認識することにある。」

この本はおおむねこのような内容を詳細に各章で展開している。

